診療室

遊牧の国モンゴルとの交流

天野　弘[†]（静岡県獣医師会・静岡県経済産業部畜産課長）

モンゴルは草原と青い空の国である．チンギスハーンや朝青龍の名前を知っていても，その実情は以外と知られていない．昨年8月，本県知事がモンゴルを訪問したことをきっかけに本県と同国との交流が始まった．私は，経済産業分野のうち農業・畜産の今後の交流方向を検討するため，昨年の11月と本年6月の二度にわたってモンゴルを訪問し，農業，畜産及び家畜衛生等の調査を行った．モンゴルには22の県があるが，本県はこのうちモンゴル東南部に位置し，中国と国境を接するドルノゴビ県（ゴビ砂漠東側）と友好を進めている．昨年11月には，日本迎賓館においてモンゴルの大統領の立ち会いの下，両県知事が相互協力の覚書を締結した．そして，この覚書を受けて，本年7月末に知事はドルノゴビ県創立80周年に県民160人とともに，富士山静岡空港からチャーター便で訪れ，今後の互恵的交流を約束した．

モンゴル国は，総面積は156万km^2で日本の約4倍，一方人口は約260万人で日本の約50分の1である．気候は温暖な日本とはまったくの逆で，雨が少なく寒暖の差が大きく冬には－40℃にもなる．首都ウランバートルは世界一寒い首都といわれている．この首都には，人口の半数近くの100万人以上が住み，市内は朝晩大渋滞となっている．街には，中国，韓国，ロシアから大量の商品が流れ込み，農産物も中国から野菜や果物が輸入されている．静岡の緑茶も含め多くの日本食品も売られている．

モンゴルは遊牧民の国である．現在も就業人口の36％が遊牧民であり，草地を求め5家畜（牛，羊，山羊，馬，ラクダ）を移動し生活している．住居はゲルと呼ばれるフェルトでできた家で，これを解体，運搬，組み立て移動する．5家畜は約2,500万頭飼われ，主体は羊と山羊がそれぞれ1,000万頭，牛が200万頭である．以前は牛肉がロシア等に輸出されていたが，現在はカシミアや皮が輸出されるだけで，畜産物のほとんどが自家消費である．家畜は草原の草のみで飼育されており，冬にはわずかに雪に隠れた枯れた草を食べて過ごすことになる．そのため，積雪により草が隠れた場合には食べる物がなくなる．1999～2001年の雪害（ゾド）では，過放牧による影響もあり約500万頭の家畜が死亡し，過放牧が大きな問題となった．過放牧は，遊牧民の最大の現金収入であるカシミア生産のため山羊の頭数が急増したことによると言われている．現在のモンゴル農業において，最大の課題は，遊牧民からこのゾドの被害を防ぐことである．JICAでは，遊牧民に野菜等の作物栽培を導入し，飼養頭数を減らし，野菜等による収入を増やす試みを支援している．

この国は，1990年のソ連崩壊により，社会主義から市場経済に急激な転換が行われた．そのため，大きな混乱が起こり，共同体制下で行われていた農業が崩壊し，農業生産力が著しく低下してしまった．しかしながら，近年では日本を含む先進国からの支援により復興が進み，昨年は小麦が32万トン収穫され100％自給に達している．これら農業はほとんどがモンゴル北東部で行われている．畜産においても，市場経済化により，国により管理されていた家畜改良や人工授精などの制度が崩壊したため，家畜の雑種化が進んでしまっている．一方，モンゴルは馬の故郷でもある．背は低いが，体格はがっちりし，大人しく，遊牧民の足であり，子供たちの通学手段でもある．また，ナーダルム祭の主役ともなる．この馬は野生馬タヒ（モウコノウマ）の血をひき，木曽馬等の日本古来の馬と遺伝的に非常に近いとも言われている．

天野　弘

—略　歴—

1978年　東京農工大学農学部獣医学科卒業
同　年　静岡県中遠家畜保健衛生所勤務
1981年　静岡県家畜衛生研究所勤務
1999年　岐阜大学大学院連合獣医学研究科で獣医博士号取得
2009年　静岡県経済産業部農林業局畜産課勤務
2011年　現職に至る

† 連絡責任者：天野　弘（静岡県経済産業部畜産課）
〒420-8601　静岡市葵区追手町9-6　☎054-221-2704　FAX 054-273-1123
E-mail : hiroshi1_amano@pref.shizuoka.lg.jp

モンゴル農業大学には獣医学部があり約700人の学生が在籍し卒業後獣医師となる．現在，推定1,600人の獣医師が治療や家畜防疫に従事しており，全国から検査依頼を受けるモンゴル中央獣医衛生検査所には各国から支援された最新の検査機器が整備されている．ただし，試薬や診断キットのほとんどが輸入となり入手が難しくなっている．モンゴルでは口蹄疫が2000年頃から散発的に発生しており，昨年8月にも発生し，東モンゴルに流行が続いていたが，同年11月には終息している．しかしながら，広大な土地と遊牧の形態から清浄化は容易でないと思われる．また，狂犬病，結核，ブルセラ病なども発生しており，家畜衛生の向上はこの国にとって喫緊の課題である．

友好を締結したドルノゴビ県は，大半がゴビ砂漠で人口は約5万人と少ない．標高は平均約1,000m，高い山はなく，年間降雨量はわずか150mmで，同国平均の半分以下である．同県の5家畜の飼養頭数は約105万頭で，砂漠化が進む中で放牧も難しい状況の中で，同県では将来の人口増加を見据えた家畜の定住化の施策も進めている．

モンゴルは気候風土において日本と大きく異なる中で，遊牧という異次元の社会構造と文化を作り上げ，今も続いている．一方で，血縁や文化等において日本との類似点も多い．世界一の親日国でもあり，現在約12,000人が日本語を学び，多くの学生が日本に留学している．

この国は若く発展途上で，今後10年，20年後には各分野で大きな発展があるであろう．畜産については，伝統を守りながら，新しい技術を導入する中で，自然環境に適した今までにない新たな畜産が発展することを期待する．わが国ではすでに一部の獣医系大学や新潟県獣医師会などでモンゴルとの技術的や人的交流を行っている．モンゴルは私達にとって遠くて近い国である．静岡県としても，畜産や家畜衛生分野を主体に，今後積極的に交流を図っていきたいと考えている．